会議録（要点記録）

令和７･８年度　堺市南区政策会議　第２回全体会	
開催日時	令和７年８月28日（木）　17時30分～19時00分
開催場所	南区役所　201･202会議室
出席構成員	大島　知子（堺市南区校区福祉委員会　会長） 岸本　啓司（堺市南区自治連合協議会　会長） 木谷　利治（堺市南区民生委員児童委員協議会　会長） 宮岡　愛子（公募） 近藤　誠司（関西大学社会安全学部　教授） 谷口　拓峰（幼保連携型認定こども園　竹城台東保育園　園長） 芳賀　敬子（堺市立茶山台小学校　校長） 三戸口　聖子（堺市立原山台中学校　校長） 井手　夏樹（南海電気鉄道株式会社　まちづくり推進室　泉北事業部　課長）
事務局（市職員）	南区役所 中山区長、阿加井副区長、松本副区長 企画総務課長、企画総務課 課長補佐、企画総務課 企画係長、 スマート区役所担当課長、自治推進課長、市民課長、保険年金課長、 生活援護課長、地域福祉課長、子育て支援課長、南保健センター所長 泉北ニューデザイン推進室 事業推進担当課長、スマートシティ担当課長
議題	（１）　堺市南区基本計画（第２期）骨子（案）について （２）　南区の防災の取組について （３）　その他
配付資料	・次第　・配席図 ・資料１　堺市南区基本計画（第２期）骨子案について ・資料2-1　避難行動要支援者対策について ・資料2-2　駅前滞留者対策について

審議状況	開会（17 時 30 分） **1 開会** **2 議題（1）堺市南区基本計画（第 2 期）骨子（案）について** 企画総務課長 ＜資料 1 に沿って説明＞ 堺市南区基本計画（第 2 期）骨子（案）についてご説明いたします。 令和 7 年 6 月に開催した第 1 回全体会では、堺市南区基本計画（第 2 期）の位置づけや体系、現行計画との変更点、イメージ図等を通じて、計画全体の方向性を提示し、構成員の皆様からご意見をいただきました。 今回は骨子案として取りまとめたものですので、本案を皆様からご意見をいただきたいと考えております。 1 ページ目では、統計データやアンケート調査の結果を基に、南区の現状や特色を示しております。特に、令和 6 年 1 月に実施した「堺市南区ウェルビーイングアンケート」の調査結果を一部抜粋し掲載しております。 本アンケートは、南区に在住・在勤・在学の 10 代以上の方々を対象に実施いたしました。骨子案には 2 つの設問結果を掲載しております。1 つ目の設問では、「南区での暮らしにおいて嬉しいと感じること」や「愛着を持っていること」について、上位 10 項目をグラフ化しております。 この設問の調査結果では自然に関する項目が上位に挙げられ、南区民が自然に対して強い愛着を持っていることが明らかとなりました。 また、2 つ目の設問では「暮らしの満足度」・「影響度」の要因分析を示したグラフを掲載しております。縦軸が満足度への影響度、横軸が満足度を表しております。 分析の結果、「自然」に関する満足度が最も高く、また「医療機関の充実」「買物」「子育て」「自身の健康を高める環境」「安心して暮らせる環境」「教育」についても満足度が高い傾向にありました。これらの結果は、南区がこれまで取り組んできた「安全・安心」「子育て・教育・健康長寿」「ブランド戦略」の 3 つの方向性と一致していることを確認しております。 このような南区の現状を踏まえ、骨子案の 2 ページに基本計画の位置づけや南区の将来像、基盤となる考え方、3 つの柱および取組方針を示しております。 続いて、2 ページ目をご覧ください。 まず、計画の位置づけですが、計画期間は令和 8 年度からの 5 年間とし、現行の南区基本計画の方向性を踏襲しつつ、さらなる区民のウェルビーイング向上を図ることを目的としております。南区の将来像は、「みどりとともにかなえる豊かなくらし　区民のウェルビーイング向上

	をめざして」と設定いたしました。将来像の基盤となる考え方として、「多様性の尊重」「世代のつながり」「地域の共創」の３点を掲げております。 　将来像の実現に向けて、「安全・安心」「子育て・教育・健康長寿」「ブランド戦略」の３つの柱を据えて、８つの取組方針を設定しました。 　安全・安心 ・人と地域のつながりを大切にします。 ・防災力を高め、安全・安心な地域社会をめざします。 　子育て・教育・健康長寿 ・妊娠中からずっと安心して子育てができるよう支援します。 ・自分の健康に関心を持ち、いつまでも元気に暮らせるよう取組を進めます。 ・困り事を一人で抱えず、幅広い相談・支援で安心して暮らせる環境を整えます。 　ブランド戦略 ・南区の魅力を広め、地域の誇りを育みます。 ・みんなで力を合わせ、南区の魅力を高めます。 　これらの取組方針につきましては、極力平易な表現を用い、難解な言葉を避けるよう配慮して作成しております。 　最後に、３ページ目をご覧ください。 　この資料は、第１回全体会で提示しました南区基本計画のイメージ図に修正を加えたものです。 　前回提示したイメージ図には、人の存在や生活の様子などの要素が含まれておりませんでしたが、今回は南区で生活する人々のライフスタイルを表現し、南区での暮らしを具体的にイメージできるよう作成しました。各世代のライフステージに応じた区の取組が循環し、ウェルビーイングの輪が広がっていく様子を表現しております。 　本計画に基づき、みどり豊かな南区の魅力を知っていただき、区民の皆様が南区に愛着を持っていただけるような取組を進めてまいりたいと考えております。 　骨子案の説明は以上です。皆様のご意見を踏まえ、次回の第３回全体会では、計画案全体を提示する予定です。 近藤座長 　事務局から説明のあった内容について、構成員のご意見を伺いたいと思います。 　今回提示された堺市南区基本計画（第２期）のイメージ図ですが、イラストで描かれたこの図を見て、南区がこれからどのような方向に進んでいくのかを、多くの方が具体的にイメージできるかどうかが非常に重要です。 　前回の資料では、中央に木が描かれていました。人の気配がなく、シンプルな構成だった

	分、かえって「この木をどう育てていこうとしているのか」という意図が読み取りづらかった印象があります。 今回の図には人の気配がありますが、前回の議論を思い出していただきたいのは、「誰一人取りこぼさない」という理念についてです。これは一体どういうことなのか。「みんなを守る」と言っても、「みんな」とは誰なのか、「一人ひとり」とは具体的にどういう存在なのか。そうした点をしっかりと具体化し、実質的な支援につなげてほしいという関心が多く寄せられていたと思います。 そのため、こうしたイラストにも、理念の「爪痕」をしっかり残しておかないと、「きれいな図ですね」で終わってしまう可能性があります。また、言葉として掲げられている「3 つの柱」はどれも美しい表現ですが、心に強く響くかというと、少し不安が残る部分もあります。ですので、皆さんにはぜひ、率直なファーストインプレッションをお話しいただければと思います。 それから、私自身は南区に住んでいないため、事務局の説明の中で出てきた「愛着度」などのデータについて、少し分かりづらかった部分がありました。資料 1 の骨子案にグラフが掲載されています。左側には棒グラフ、右側にはドットが打たれていて、「満足度」「影響度」「要因分析」とあります。右上に位置する項目ほど、満足度が高く、かつ影響度も高い、つまり重要な要素ということになります。 自然環境については、多くの方が満足していることが読み取れますが、それを左にスライドして見ていくと、「介護福祉施設」は非常に重要な項目であるにもかかわらず、満足度が 30%台と低く見えます。 教育や買い物には高い満足度があり、医療機関も充実していると評価されている一方で、「健康長寿」をめざす南区において、介護福祉施設の満足度が低いのはどうしてなのか。その背景を、もし木谷さんからご説明いただけるようでしたら、ぜひお伺いしたいと思います。 木谷構成員 介護・福祉施設について、南区ではいわゆるハード面の整備が不十分という点が一つの要因として考えられるのではないかと思います。 しかしながら、南区には包括支援センターが設置されており、同センターが窓口となって民生委員の方々とも連携しながら様々な相談に対応しております。そのため、一定の満足度は得られているものと考えております。とはいえ、アンケート結果において満足度が約 30%という数値であったことから、一般の区民の方々には、介護・福祉施設の現状についてそれほど高く評価されていない可能性があると受け止めております。 近藤座長 今回、こうした点をピンポイントでお尋ねしたのは、まさに「一人ひとり」という部分が、今後の計画の重要な焦点になると感じているからです。

	現在は満足度だけを見ている状況ですが、実際にはしっかりとしたサービスが提供されているにもかかわらず、皆さんの満足の基準が非常に高いために、そこに追いついていないように見えてしまっているのかもしれません。 そのような背景を踏まえ、「これから頑張っていくんだ」と思えるような計画、そしてそれが骨子となるような取組が必要だと考えています。 そのあたりも含めて、皆さんからご意見を伺えればと思います。どんな視点からでも構いません。見た目の印象でも、内容の深さでも、あるいは今のような個別の事例でも結構です。 「実際にはこういう状況なんだけど、こういう部分って計画にちゃんと反映されているのかな？」といった疑問でも構いませんので、委員の皆様からぜひお声をいただければと思います。 岸本構成員 ウェルビーイングアンケートの結果について前回の会議でも申し上げましたが、私は数字だけでは信用できないと考えております。具体的にどのような方々がそのように感じておられるのか、という点に疑問を持っております。確かに泉ケ丘駅前には、高島屋やパンジョなどの商業施設がございます。しかしながら、駅前まで行かなければ買物ができないという方も多くいらっしゃいます。 南区の 19 校区の中で、駅まで行かずに買物が可能な地域は、数えるほどしか存在していないのが現状です。このような状況を改善できるのかどうか、また、これが本当に「ウェルビーイング」と呼べる状態なのかについては疑問を感じております。 自然が豊かなことは南区の特徴ですが、それだけで若者が定住するかというと疑問です。若者が定着できるような施策が必要であり、政策会議ではその視点を持っていただきたいと思います。 近藤座長 南区という地域の広がりについて、私はまだ具体的なイメージを持っていませんでしたが、岸本さんから「19 校区」というお話がありました。 地理的な広がりの中にも、きっと凸凹や違い、個性があるのだと思います。そうした点も含めて、もっとイメージが膨らむような工夫が必要だと感じました。大事なポイントをご指摘いただきました。そして「若者」というキーワードも印象的でした。 芳賀構成員 今回のイメージ図を拝見し、いくつか気になる点があります。 まず、左側下部に描かれている「こどもが苗を植えている場面」ですが、具体的にどこで植えているのかが不明瞭であることが気になりました。

	また、その上部に描かれている登下校の見守り活動ですが、現在、見守り隊の高齢化が進んでおり、活動の継続が困難になってきているという現状がございます。 さらに、図の中央付近に描かれているバスですが、これが今後も存続可能なのかという点に懸念を抱いております。先ほどの駅前に関するお話にもありましたが、南区には駅から遠い地域が多数存在しており、そうした地域にお住まいの方々が通院などで外出する際に、交通手段が維持できるのかどうか気になります。 学校周辺の状況を中心に申し上げましたが、イメージ図に描かれている内容が、実際の地域の課題や現状をどの程度反映しているのかについて、少々気になる点がございました。 近藤座長 このイラストに描かれているバスは、南区を実際に走っているバスそのものですか。 企画総務課長 正確には実際のバスというよりも、南区のバスをイメージしてイラスト化したものです。 近藤座長 承知いたしました。なかなか難しい課題ではございますが、実際の写真を使うことで、よりリアルな南区民の姿を表現できるのではないかと考えております。 現在のイラストは、温かみのある表現で工夫を凝らして描いていただいていることは理解しておりますが、抽象的な描写となっているため、少しメルヘンの世界のような印象を受ける部分があります。 みんなで協力して写真を集めて、リアルなこどもたちの様子やバス、小道、防災訓練の様子などを図に埋め込むことで、より現実に即したイメージ図になるのではないかと感じております。 三戸口構成員 この図を見たときに、私は中学校に勤務しているので、小学生の絵はあるのに、中学生や高校生が描かれていないことに気づきました。 若い世代の構成員を募るという話があるので、小学生からいきなり新婚世代に飛ぶのではなく、大学生や若い社会人などの絵もあった方が良いのではないかと感じました。 近藤座長 すべての要望を叶えるのは難しいかもしれませんが、事務局の方も「どうしよう」と思っているかもしれません。でも、まずは率直に意見を出し合って、より良いものをめざしましょう。 今のご意見は、ライフステージをもっとリアルに表現した方が良いということだと思います。

	円を描くようなイラストで、矢印も付いているので、年齢を重ねていくイメージで作られていると思いますが、アイコンを増やすことで、中学生や高校生など、より多くの世代を表現できるかもしれません。グラフィックを担当されている方にとっては、難しい注文かもしれませんが、こうした細かい部分が意外と大事なのだと、私も皆さんのお話を聞いていて感じました。 井出構成員 ２点、気になった点があります。 １点目ですが、資料１の１ページ「暮らしの満足度・影響度の要因分析」の部分です。今回の資料では、「強みを伸ばしていきましょう」という方向性が見受けられますが、その先にある目的が「南区に住む皆さんに愛着を持ってもらうこと」だと考えると、逆に「弱み」の部分、つまり左上の「要改善項目」にある内容も重要なのではないかと思いました。 それらの弱みを改善することで、地域への愛着に繋がる可能性もあるのではないかと感じています。もちろん、どちらを重視するかは方針の問題だと思いますが、弱みをそのままにしておくのではなく、改善していくというアプローチも必要ではないかと考えました。 ２点目はイラストについてです。全体的に小学生くらいのお子さんが多く描かれている印象を受けました。これは、潜在的にその年代層の方々に住んでもらいたいという意図があるのかもしれません。もちろん、それ自体は否定するものではなく、イメージとして理解できます。 ただ、今回の資料は「今住んでいる方々に愛着を持ってもらう」というアプローチをしているはずなのに、イラストからは「外から人を呼び込みたい」という印象も少し感じられました。そのあたりの表現に、もう少し工夫があっても良いのではないかと感じました。 近藤座長 重要な視点を２つご指摘いただきました。 まず１点目の「弱みを改善するか、強みを伸ばすか」という点ですが、確かにその選択は難しいところです。 ただ、おそらく区民の皆様は弱みをそのままにしておくというよりも、改善することで地域の力に変えていきたいと考えていらっしゃるのではないかと思います。 この満足度調査の結果を活用するのであれば、強みだけでなく弱みも含めて、両方の視点を政策に取り入れていく必要があると感じました。つまり、どちらかを選ぶというよりは、両方を同時に進めていくことが求められるのではないでしょうか。 また、今回の調査は「現在住んでいる方々の満足度」を出発点としているため、まずはその方々にとって愛着の深まる地域をめざすことが重要です。その結果として、外部の方々にも魅力が伝わり、移住や交流につながるという流れが自然だと思います。 いわゆる「関係人口」や「交流人口」といった外向きの施策よりも、まずは地に足のついた地

	域づくりをしっかりと行うことが、6 月の会議で皆様からいただいたご意見の方向性であったように思います。 　本日はその点も含めて、さらにご意見があればぜひお聞かせいただければと思います。 谷口構成員 　1 ページ目の「人口減少」ですが、特に若年層の流出が多い点は、やはり難しい課題だと感じています。若い人たちは SNS などの情報を通じて、より魅力的に見える都市部へと移動してしまう傾向があります。 　私自身は南区に長く住んでおり、緑豊かな公園など自然環境の良さを日々感じています。資料にもコメントがありましたが、そうした点は非常に魅力的だと思います。 　ただ、住み続けるとなると、進学や就職のタイミングで都市部へ出ていく流れがあるのも事実です。SNS などで「キラキラした」生活が発信される中で、南区の魅力が埋もれてしまうこともあるのではないかと感じています。 　また、「子育て」という観点では、南区は非常に良い環境だと思います。ですが、働く場所の少なさも課題です。資料にも記載されていますが、地域内で魅力的な職場が少ないことが、若年層の定着を難しくしている要因の一つだと思います。 　このような人口減少や就労環境の課題が、2 ページ目の「将来像」にどのように組み込まれているのかが少し気になりました。 　さらに、最後のページのイラストですが、細かい点ではありますが、赤ちゃんを抱えたお父さん・お母さんとこどもたちが全員同じ向きで整列している様子が、少し不自然で怖い印象を受けました。AI で描かれたのかな？という印象もありました。 　また、畑で苗を植えている場面や、右端の「家族団らん」の場面も、情報量が多すぎて見づらい印象があります。 　個人的な意見ですが、バスや電動キックボードが描かれている場面についても、事故やマナーの問題など、あまり良い印象を持っていないため、少し気になりました。 　最後に、南区では「だんじり」が盛んだと聞いていますが、私の住んでいる地域ではあまり見かけません。イラストに描かれているだんじりが本物に近いものかどうかも気になります。 近藤座長 　イラストの中に描かれている神輿、あるいはだんじりの様子ですが、これは実物に近いものなのでしょうか？ 　こうした伝統的な文化に関しては、実際に活動されている方々の思い入れも強いため、もし実態と異なる表現がされている場合には、ご不満を持たれる点になるかもしれません。 　ただ、現段階ではまだ試作段階の資料ですので、皆様にはその点をご容赦いただきつつ、

	「こうしていきたい」という方向性について、意見を重ねていければと思います。 　また、人口流出の問題は、しっかりと向き合っていく必要があると感じています。若者が都市部に憧れて移住してしまうというのは、確かに難しい課題です。 　骨子案にあるグラフでは、緑豊かな環境や教育・子育ての充実といった点が満足度の高い要因として示されています。さらに、文化創造の拠点として「ビッグバン」などの施設もあり、文教地区的なイメージを持たせることも可能かもしれません。 　これは一種のブランド戦略とも言えるもので、「こんなに教育環境が整っている地域は他にない」といった静かで自然に触れながら学べる場所としての魅力を打ち出すことができるのではないでしょうか。 　現在の３つの柱やイメージ図では、そうした文教的な側面がやや見えづらい印象もありますので、今後の表現に工夫が必要かもしれません。 「キラキラ戦略」ではないにしても、若者にとって魅力的に映るような要素を盛り込むことは重要だと思います。今のご指摘は、非常に大切な視点だと感じました。 宮岡構成員 　将来の基盤となる考え方や３つの柱、そして取組方針は、すごく良いなと思いました。「多様性」「世代のつながり」「地域の共創」という考え方、そして「安全・安心」「子育て・教育・健康長寿」「ブランド戦略」という柱の構成は、非常に共感できるものであり、南区の方向性としてふさわしいものだと思います。 　「みどりとともにかなえる豊かな暮らし」という表現も素敵ですが、区民一人ひとりがその言葉から具体的なイメージを持てるかというと、必ずしもそうではないように思います。 　私たちも含めて、それぞれが異なるイメージを持っている可能性があり、そこに弱さがあるのではないかと考えております。将来像は、誰もが南区民として共通のイメージを持てるような形で設定されることが望ましく、特に若者や小・中・高生など、これからの世代にとっても分かりやすく、親しみやすいものである必要があると感じております。 　私は、現在の南区の基本計画を受けて、「自分に何ができるか」を“自分事”として捉える手立てが必要だと感じています。 　そのような視点からイメージ図を見た際に、「ここなら自分も何かできる」「今ここにいるからこそ、こんなことをやってみようかな」と思えるような、そんな図にしていけたらと思っています。 　三戸口さんがおっしゃっていたように、中高生の姿を図に加えることは非常に意義があると思いますし、「誰かに相談できる場面」や「困難を乗り越えていく様子」なども描かれることで、区民の安心感につながるのではないかと感じております。 　この柱の考え方は本当に素晴らしいと思います。私はとても気に入っています。

	近藤座長 エールのお言葉とともに、大切なポイントをご指摘いただきました。 理念として掲げられている「多様性の尊重」「世代のつながり」「地域の共創」といったキーワード、そして 3 つの柱など、コンセプトが豊富にある分、少し言葉が過剰になっている印象もあります。そのため、アイコンやイラストで補っていく工夫が必要かもしれません。 宮岡さんのお話を受けて、ライフステージに沿って構成する方法もありますし、「人々が助け合っている」「学び合っている」「手助けしてもらえて嬉しい」といったシーンを、木の中に並べて描くようなイメージ図も良いかもしれません。そうすることで、「私もその助け合いの場に加わって、暮らしの主人公になれるんだ」と、自分事として捉えられるようになると思います。 宮岡さんがおっしゃっていた「自分事として捉える手立てが欲しい」という言葉は、とても重要だと感じました。 また、世代のつながりがイラストでしっかり表現されていないといけませんし、多様性の尊重についても、現状ではやや薄い印象があります。たとえば、ハンディキャップのある方をサポートしているような日常のシーンは実際には多くあるのに、イメージ図では十分に表現されていないかもしれません。そうした部分も、絵で補っていく必要があると感じました。 ライフステージに沿った構成の方が、逆にイメージしやすいという意見もありましたので、今後のブラッシュアップに向けて、非常に有益なヒントをいただけたと思います。 木谷構成員 南区の現状について触れさせていただきます。 まず、南区には産業がほとんどなく、若者が定着しづらいという課題があります。若者が一度区外に出てしまうと、戻ってこないケースが多く、これは単に住宅の問題だけではなく、仕事や生活の利便性が確保されていないことも要因だと感じています。 そのため、若者が自宅で仕事をしながら生活できるような住宅環境の整備も、今後の重要な課題だと思います。 また、イメージ図ですが、ライフステージに合わせて細かく描くことで、さまざまな生活シーンが表現されていて良いと思います。 ただ、例えば「だんじり」のような伝統文化は、旧村には根付いていますが、ニュータウンにはそうした文化が存在しないため、地域間のギャップが大きいのが現状です。 だんじりのような文化がある地域には若者が集まりやすいですが、ニュータウンではそうした集まりがほとんど見られません。南区には 19 の校区がありますが、伝統文化を共有できる地域は限られているのではないかと思います。 旧村とニュータウンとのつながりも、実際にはうまくいっていない部分があるように感じています。イメージ図にだんじりが描かれていること自体は良いと思いますが、ニュータウンに住む方々

	にとっては、あまり身近に感じられない可能性もあるため、図としてのイメージが共有されにくい点があるのではないかと感じております。 近藤座長 南区のようにエリアが広いと、地域ごとのカルチャーや歴史、暮らし方に違いがあることを改めて感じました。私自身、そのあたりの理解がまだ十分ではなく恐縮ですが、そうした地域の多様性をしっかりとすくい取っていけると良いですね。 例えば、ニュータウンにお住まいの方がだんじりなどの伝統文化に触れる機会を持つことで、地域の文化が混ざり合い、区全体がより一体感を持てるようなアクションが求められているのではないかと感じました。 また、「職・住・近接」という観点では、時代の潮流を見てみると、むしろ今は強みになってきているように思います。スマートシティ構想にも通じる部分ですが、クラウドやデジタル産業の発展により、在宅でできる仕事が増えています。例えば、デザイナーやホームページ制作、デジタルコンテンツの開発などは、必ずしも都市部に住む必要がなくなってきています。むしろ、家賃の高さがネックになっているケースも多いです。 そうした背景を踏まえると、若者を惹きつけるような仕事や住まい方の提案は、今後どの地域でも求められるテーマになると思います。南区には大学や高校もあり、人材の基盤があるので、今後のテコ入れ次第ではまだまだ可能性が広がると感じています。 産業が少ないことによる満足度の低さや、課題として感じている方々へのアプローチは、今後の制度設計において非常に重要なポイントになると思います。 大島構成員 このイラストを見る限り、現在区役所が取り組んでいる施策が、ほぼすべて網羅されているように思います。子育て支援、農作業体験、見守り活動、ウォーキングイベントなどいずれも区が実施しているものであり、それらの活動を視覚的に表現したものと理解しています。 次にモビリティについてですが、私自身「電動キックボード」と呼ばれているものには、あまり魅力を感じていません。自転車などの方が適していると思いますし、高齢者向けのスクーターなどを描いていただけると、より現実に即したイメージになるのではないかと考えています。 それから、人口減少の問題に関連して、家賃が高いという問題があります。実際、私の息子も堺市での居住を希望しておりましたが、家賃が高く、希望に合う物件が見つからなかったため、隣接する大阪狭山市へ転居しました。大阪狭山市では比較的家賃が安価で、同じ地域に若い世代が 100 世帯ほど集まっている状況です。 このような事例を踏まえ、南区でも若者が集まりやすい住宅環境の整備を検討すべきではないかと考えております。

	さらに、暮らしの満足度に関するアンケート結果にも触れさせていただきます。 南区全体で見ると、スーパーが閉店してしまった地域が多く、「買物に満足している」との調査結果が示されておりますが、実際にはどの地域で満足されているのか、疑問を感じております。 医療機関の充実についても同様です。高齢者にとっては、整形外科や内科などの診療科が自校区内で受診できる環境が整っているほうが、生活の質の向上につながると考えています。私の校区では現在、歯科と小児科のみが存在しており、内科などの診療科が不足している状況です。 このような現状を踏まえ、計画策定にあたっては地域ごとの実情をより深く理解し、反映していただきたいと強く願っております。 以上です。 近藤座長 今回のイメージ図は、さまざまな課題に対して、みんなで前向きに取り組み、南区の未来を盛り上げていくための「基本計画のイラストレーション」として位置づけられるものです。 現状では十分に伝わっていない部分もあるかと思いますが、「こうなったらいいな」という未来像を盛り込むことも一つの方法ですし、リアルな生活シーンをうまく切り取ることでより現実味のある図として受け止められる可能性もあると感じております。 南区は緑被率が非常に高い地域ですので、図の中で緑の要素をもっと強調して、様々な生活シーンを木の中に埋め込むような構成にするのも一案かと思います。 ライフステージの流れで構成するのではなく、生活のさまざまな場面を根っこから栄養を吸い上げて育てていくようなイメージ、たとえば、助け合いの場面、子育て、教育、健康長寿、多様性を感じ取れるような場面などを盛り込むことで、皆様のイメージにより近づくのではないかと考えております。 この点は、ぜひ議事録に記録していただければと思います。 岸本構成員 皆さんのご指摘のあった点は、いずれも的を射た内容であると感じています。 まず、だんじりについてですが、旧村にのみ存在しているという点は否定できない事実であり、ニュータウン地域にはだんじりが存在していないという現状があります。 今回のイメージ図は、非常によく考えられて作成されていると感じております。 特に最後の場面は老齢期を表していて、こどもが描かれていることで、全体として「うれしい未来」が表現されています。ただ、実際の生活がこのイメージ通りに進行するとは限らないため、現実に合わせてどのように調整していくかが課題だと思います。

	安全・安心や子育て、ブランドなど、各要素に印を付けていただいていますが、例えばモビリティの面では、先ほど大島さんからコメントがあったように、モビリティの描写については現実との乖離が見受けられます。泉北地域では南海バスが主な交通手段であり、それ以外のバスは基本的に運行されておりません。南海バスがこのように走るのかという現実的な課題もあります。あくまでイメージとして捉えるのは問題ないですが、あまりにも実態とかけ離れているのは良くないのではないかと思います。 将来像として掲げられている「みどりとともにかなえる豊かな暮らし」についても、どのように実現していくのかという点が重要であり、単なる理想像ではなく、実際に「こんなふうになっていくのだ」と区民が具体的にイメージできるような構成が望ましいと感じております。 また、各種データをもとに計画が構成されることと思いますので、そのデータの検証についても、ぜひ丁寧に行っていただきたいと考えております。 近藤座長 夢のある部分と、リアルな生活に根差した部分の両方を兼ね備えた、実質を伴う計画にしたいという思いが、今この場における総意として共有されているように感じております。 そのような思いを表現し、まとめていくことは至難の業とも言えるかもしれません。 ただ、これだけ多くのご意見を頂戴できたことを踏まえれば、もう一歩踏み込んだブラッシュアップが可能であると期待しております。 今回の構成では、基盤の部分と 3 つの柱の部分、つまり「3×2」の要素をこの中に盛り込もうとしているため、かなり苦労されたのではないかと思います。 その中でも、事前にしっかりと策を練り、最善に近い形で組み上げられていると感じました。あとは、もう少し図の構成にメリハリをつけることがポイントかもしれません。 今はまだ迷いのある段階かと思いますが、今後さらに知恵を絞って、次のステップ、10 月頃にはかなり固まった形になってくると思いますので、楽しみながら、このイメージ図自体をみんなで育てていく姿勢で取り組んでいければと思います。 さて、続いて次第の(2)南区の防災の取組について、に移りたいと思います。 まず、事務局から資料の説明をお願いします。 **3 議題（2）南区の防災の取組について** 自治推進課長 防災の取組についてご説明いたします。お手元の参考資料 2「南区の防災の取組について」をご覧ください。こちらは前回の会議でご説明した内容でございます。 第 1 期の南区政策会議において策定した、南区独自の防災力向上モデルには、以下の 5 つの柱を設定しております。

	①オール南区での防災意識の向上 ②誰一人取りこぼさない防災福祉の推進 ③あたらしい共助のかたちの確立 ④防災人材の育成 ⑤防災情報の共有手法の拡充 これらの柱を具体化するため、令和 5 年度から以下の事業を実施しております。 ①自主防災組織実務者連絡会 ②防災士養成プログラム ③学生防災リーダー養成講座 令和 7 年度には、これらの継続事業に加え、第 2、第 3 の柱に基づく新規事業として、「避難行動要支援者対策」および「駅前滞留者対策」に取り組みます。 災害発生時における区役所の初動対応として、高齢者、障害者、妊産婦、外国人等の要配慮者のニーズを把握することが求められております。 とりわけ、災害時に自ら避難することが困難である「避難行動要支援者」について安否及び被災状況を確認するとしています。 これまで、庁内関係部局で構成される防災対策推進本部幹事会において、要配慮者専門部会を設置し、避難行動要支援者の安否確認等について検討を重ねてまいりました。南区では、これを「誰一人取りこぼさない防災福祉の推進」として位置づけ、より具体的な対策を検討してまいります。 ＜資料 2－1 に沿って説明＞ 南区における避難行動要支援者の対象者数は約 12,800 人であり、そのうち要支援者一覧表への登録者は約 4,100 人となっております。登録者の約 55%は、要介護 2 までの高齢世帯です。 震度 6 弱以上の大規模地震が発生した場合、区災害対策本部の避難者支援班および保健師等職員が、24 時間以内に対象者へ電話・訪問等により安否確認を行うこととしております。しかしながら、職員数には限りがあり、発災時にどれだけ参集できるかは不確定であり、また混乱の中で職員が担う業務は多岐にわたるため、一方向での情報確認は現実的には困難であると想定されます。 そこで、南区がめざす安否確認の仕組みとして、可能な限り要支援者自らが安否情報を発信することで、効率的に区災害対策本部に情報が集約される仕組みを構築いたします。 要支援者が普段からの支援者を通じて、自主防災組織や指定避難所へ連絡し、区災害対策本部に情報を集める流れを想定しております。 情報発信が困難な方や安否確認が取れない方については、区災害対策本部が支援者の協力を得て安否確認を行い、支援を要する方への対応を実施します。

	令和７年度中には、要支援者が発災時に自ら情報発信等の行動を促せるようなハンドブックを作成し、翌年度には配布およびハンドブックを活用した防災訓練の実施を検討しております。あわせて、個別避難シートの作成につながるような啓発活動も進めてまいります。 続いて、資料 2-2「駅前滞留者対策について」をご覧ください。 ＜資料 2-2 に沿って説明＞ 東日本大震災では、公共交通機関の運行停止により駅前に多くの帰宅困難者が滞留し、混乱が生じました。 南区には、南海電鉄泉北線の３駅があり、通勤・通学での利用者が多い地域です。 さらに、令和７年 11 月には泉ケ丘駅周辺に近畿大学医学部と附属病院等が移転する予定であり、利用者の増加が見込まれます。 同規模の地震が発生した場合、区内の３駅においても駅前滞留者が多数発生することが予想されます。現状では、企業・学校・病院等における帰宅困難者対応が統一されておらず、また、栂・美木多駅および光明池駅には市指定避難所が近接している一方で、泉ケ丘駅周辺には一時滞在スペースが乏しいという課題がございます。 対策として、栂・美木多駅および光明池駅については、指定避難所を駅前滞留者の一時滞在施設として併用活用し、泉ケ丘駅については市施設である「ビッグバン」を一時滞在施設として活用する方向で検討を進めてまいります。 また、必要な物資の整備、発災時の職員の派遣の検討、鉄道事業者との情報共有などを進め、令和７年度中にマニュアルの整備を行い、令和８年度には図上訓練を実施します。引き続き、災害から命を守るため、すべての区民が支援者・受援者として防災力を高め、地域とともに「誰一人取り残さない」安全・安心な未来を共創してまいります。 近藤座長 防災の取組について、全体の見取り図を改めて確認いたしますと、参考資料２に示された「南区の防災の取組」ではこれまで第 1・3・4・5 の柱に基づく事業が進められてきました。今回の説明では、特に第２の柱である「誰一人取りこぼさない防災福祉の推進」を実質化するために、２つの重点事業が紹介されました。 ・避難行動要支援者マニュアルの作成 ・災害時に駅周辺に滞留する帰宅困難者への対応 説明の順序としても、まず「避難行動要支援者マニュアル」を上位に置き、在住の区民の皆様、特に要配慮者の方々に対する支援を重視する姿勢が示されておりました。その上で、駅前に滞留する方々に対しても「誰一人取りこぼさない」という理念を広げていく構成となっており、非常に意義深いものと感じております。 まずは、避難行動要支援者に関する内容も含まれておりますので、木谷様からご感想をい

	ただければと思います。 木谷構成員 　要支援者の登録をされている方は把握していますが、南区全体としては「災害が起こりにくい地域」というイメージを持たれている方が多いのではないかと感じております。 　そのため、避難所への避難よりも自宅避難を前提とした対応が現実的であり、特にライフライン（電気・ガス・水道）が停止した場合に備えた対策を各家庭で講じていくことが望ましいのではないかと考えております。 　また、「個別避難シート」の作成は、南区では後回しになっているのが現状です。確かに、避難の必要性は西区など他の区に比べて低いとされており、整備が進んでいない面もあります。 　しかしながら、過去に調査を行った状況と比べて、現在では車椅子を利用されている方や、身体の状態が悪化している方が多くなっていると推察されます。 　したがって、自身の状況を把握し支援を受ける準備を整えるためにも、要支援者ご本人にもその存在を認識していただく必要があるのではと考えております。 近藤座長 　避難所に向かうべきかどうかという点については、もう少しリアルに考えて「ご自宅が安全・無事であれば、自宅で避難生活を送る」という方針を打ち出している自治体も出てきており、「避難」という言葉やそのイメージの共有の仕方については、今後さらに精査していく必要があると私自身も感じました。 　また、安否確認は、しっかりと行っていきたいという思いのもと、今後、個別避難シートの作成や防災訓練の実施が予定されていることと思います。先ほどの議題で共有された「誰一人取りこぼすことなく、日常から見守りを行う地域づくり」という大きなビジョンに照らしても、日常の見守り体制が災害時の安否確認体制に繋がっているというイメージでこの取組を打ち出していくことが、南区にとっては非常に望ましい方向性ではないかと感じております。 　国が言っているとおりでいうと、「公的な支援には限界があるため、自助・共助で対応してほしい」という説明がなされておりますが、それ自体は間違ってはいないものの、住民にとってはあまり心強く感じられるものではないかもしれません。 　それよりも、「地域のみんなで日頃から見守り合っていこう」という姿勢を打ち出し、それが災害時にも自然に延長されるという考え方のほうが、住民の共感を得られやすく、南区らしい温かみのある防災体制につながるのではないかと思います。 　この取組は非常に重要で、今後どのように発信されるかによって、賛同者が増えるかどうかが大きく左右されると思いますので、ぜひ丁寧に進めていただきたいと願っております。 　福祉委員をされている大島さんから見て、この話はいかがですか。

大島構成員

可能な限り、要支援者の方が自ら情報を発信するという仕組みは、非常にありがたいと感じております。防災の担当として、要支援者の方々の状況をチェックはしておりますが、多くの方がいらっしゃる中で、「誰が見守りに行くのか」という課題もあります。ご本人から情報を発信していただけることで、支援側の負担が軽減されるという点でも、大変助かる仕組みだと思います。

また、個別支援については、10 年ほど前から取組が始まっておりますが、実際には、要支援の方の見守りに行った際にも、動かすことができない方がいらっしゃるなど支援の難しさを感じております。酸素吸入されている方や、手足が不自由な方など、障害のある方と一緒に対応する必要がある場面もあり、自治会だけでは対応が困難なケースもございます。

私は 2 年ほど前からようやく個別支援が動き出したという印象を持っております。現在は、全市で 20 人程度の支援が進んでいる状況であり、南区まで十分に行き渡っているとは言えませんが、今後徐々に拡充されていくことを期待しております。

このような支援においては、家族や近隣住民と協力しながら助け合っていくという姿勢が重要であり、堺市がそのようなメッセージを発信してくれたことは非常に良かったと感じております。

また、要支援者の方々も、「助けてもらう」だけではなく、「自分から発信できる」という意識を持っていただくことで、支援する側も受け入れやすくなり、結果として支援体制が円滑に機能するのではないかと思います。

現在、約 400 人の要支援者の方がおられますが、「この方々をどう支援していくのか」という課題を目の当たりにすると、支援者側としては非常に大きな負担を感じることもあります。

近藤座長

避難行動要支援者の支援に関しては、単に名簿に登録されているから助けてもらえるという受け身の姿勢ではなく、地域全体で考えていくべき課題であるという認識を広げていく必要があると感じました。南区として、「誰一人取りこぼさない」支援体制を築いていく姿勢を打ち出すことで、ウェルビーイングと安全・安心が重なる領域として、今回の取組が計画の中心的な位置づけになると思いました。

個別避難計画の策定数については、数値目標にとらわれるのではなくて、支援が本当に必要な方に対して実効性のある計画を丁寧に作成することが重要であると考えています。

先ほど言ったような酸素吸入をしている方など、そういう方の計画を立てるのはすごく難しくて、民生委員や社会福祉協議会、ケアマネジャーなどみんなが集まって会議するわけですね。

なので、数とか作成率などの数字に振り回されるよりも、中身を充実させる必要があると思います。これには地域の力も期待されているところですが、岸本さん、この話いかがでしょうか。

	岸本構成員 要支援者については、そうした方々が一時避難所に来られた場合、我々としても対応が非常に難しいというのが現実です。指定避難所に実際に連れて来られた際に、どのように対応すべきかという点は、自治会としても明確な方針が持てず、難しいという声が上がっております。 また、施設への避難をお願いする場合でも、受入体制が整っているかどうかは不透明であり、課題が残っていると感じております。人手不足の問題は、現時点では解決が難しいのではないかと考えております。 個別避難シートは、堺市全体で約 400 名が対象となっており、そのうち南区では現在 12 名が登録されている状況です。1 人の要支援者に対して 2～3 名の支援者が登録されているケースもありますが、実際にその方々が支援を行えるかどうかは、依然として課題であると感じております。 また、災害時にその方々へどのように連絡を取るのかという点についても、現時点では明確な解決策が示されておらず、対応が困難であると認識しております。 このような課題を政策会議の議論だけで解決するのは難しいのではないかと思います。1 つひとつの課題を丁寧に検証しながら、段階的に対応を進めていく必要があると考えております。 近藤座長 この問題は、日本中が頭を抱えている課題であり、この場で突然解決策が導き出されるものではありませんが、「個別避難計画」という旗振りに必ずしも引っ張られる必要はなく、各家庭・世帯ごとの災害時の対応方法が明確になれば、安全・安心の確保につながるのではないかというのが、皆様の率直な思いであると受け止めております。 事業としては一定のフォーマットに沿って進める必要があるものではありますが、そうした形式的な枠組みにとらわれすぎず、住民の本音にどこまで寄り添えるかが、今後の取組において重要な視点であると感じております。 もう一つの政策課題である「駅前滞留者」への対応ですが、井手さんいかがですか。 井出構成員 駅前滞留者対策は、もともと南区からご相談をいただいた経緯がございます。駅周辺の安全確保は鉄道部門の所管であり、現在調整を進めている状況です。 先日、泉北地域では珍しく人身事故が発生し、駅前に多くの人が滞留する事態となりました。泉北地域は踏切のないエリアであり、人身事故や接触事故が起こりにくい地域です。職場に残っていた同僚からは、非常に珍しい事例であったこと、駅前に人が滞留しバスなどのほかの交通手段も便数が限られているため、対応に苦慮したと聞いております。こうした事態に備えるためにも、事前のシミュレーションや計画の整備は非常に重要であると感じております。

近藤座長

鉄道会社にとっても、駅前滞留者対策はCSR（企業の社会的責任）につながる話ですし、南区のブランド力向上にもつながると考えられます。また、計画や訓練が進んでいることを地域に示すことで、地域からの信頼を得ることにもつながります。

私自身が関わった新大阪駅でのシミュレーション事業では、南区とは規模が大きく異なりますが、南区の場合には「居合わせた人同士が助け合う」体制の構築が不可欠であると感じております。全員が「支援を受ける側」として構えてしまうと、行政の対応が後手に回る恐れがあるため、自助・共助の意識を高めるための作戦づくりが重要です。

宮岡構成員

先日のカムチャッカ半島の地震での突然の津波に驚きました。あのようにすぐに津波が来るのだということを実感し、自分の住む地域ではどのような対応が可能なのか、改めて考えさせられました。

先ほども言及がありましたように、南区で「自宅避難」を行うためには、公的支援を受ける体制として、自治会がしっかりと機能している必要があります。どこにどのように対応すればよいかは、住民自身にしか分からないため、自主防災組織の連携強化は、非常に身近で重要な課題であると感じております。

また、東日本大震災における「釜石の奇跡」は小学校・中学校で防災教育がしっかりと行われていたことが背景にあります。こどもたちが「逃げるよ」と祖父母らに声をかけながら避難したという事例。そうした点を踏まえて、特に中学生が災害時に果たす役割は非常に大きく、今後の防災の中核を担う存在として、力を入れていただきたいと考えております。

さらに、能登半島地震では、アレルギーを持つこどもへの対応が課題となりました。学校で避難した際に、アレルギーのあるこどもが食べられるものがないという問題がありました。私自身もまだその点について十分に学べていないため、今後しっかりと知識を深めていく必要があると感じております。

最後に、座長からもご指摘がありましたが、南区で避難訓練が実施されることは、地域のブランド力向上にもつながると感じました。計画や人員配置について、まず実施してみることが重要です。失敗を恐れず取り組み、課題を洗い出すことで、住民の安心につながっていくと考えております。ここは本気で取り組むべき課題だと強く感じております。

近藤座長

釜石では、鉄鋼やラグビーに加え、防災教育の成果である「釜石の奇跡」も地域のブランドとして定着しています。南区でも防災の取組がブランドの一つとなることを期待しています。

次に、谷口さんいかがでしょうか。

谷口構成員

	私は主任児童委員として民生委員の方々と話す機会がありますが、高齢者の見守りのために電話をかけることが負担になっているという声をよく耳にします。そうした支援の必要な方々に対して、むしろ支援者側から電話をかけていただける体制があれば、それはそれで良いのではないかと感じています。 そのような仕組みによって、地域の支援者の負担が軽減されることを期待しています。また、要支援者から支援者への連絡、特に自主防災組織への連絡におけるスピード感については、どのような体制になっているのか気になるところです。 災害時には、要支援者が発信可能であっても、「怖かった」で終わってしまい、連絡がないケースも多くあると考えられます。そのため、要支援者に対しては、災害時には必ず連絡を行うよう、事前にしっかりとした指導や啓発を行う必要があります。そうした仕組みづくりが整えば、より実効性のある支援体制が構築できるものと考えております。 芳賀構成員 私が現在力を入れている取組は、こどもたちの「挨拶」です。地域の見守り活動に参加してくださっている方々の人数は減少傾向にありますが、そうした方々に対して、こどもたちが必ず挨拶をするよう指導しています。その理由に「共助」という考え方があります。災害時に助け合うためには、顔も知らず言葉を交わしたことのない相手とは、いざという時に自然な助け合いが生まれにくいと感じています。そのため、地域の方々に「この地域にはこういうこどもがいるのだ」と知っていただくという意味で、挨拶を大切にするようにしています。 また、支援学級に在籍する児童の割合が比較的高い学校では、従来の支援教育の考え方として「こどもを困らせないようにする」という姿勢がありましたが、現在では「困っているときに、困っていると伝えられるこどもに育てる」という方向に変化してきています。自分で「助けて」と言える力を育むことが重要だと考えています。 さらに、災害はいつ発生するかわからないため、こどもたちが非常時にどのような行動を取るべきかを理解していることが大切です。私が勤務する小学校は堺市内で最も標高が高い場所に位置しており、多少の雨では浸水しないというバイアスがこどもたちの中にあるように感じています。しかし、近隣の学校では、地形の関係で 1 階部分がすぐに浸水する可能性があるという話も聞いており、同じ地域内でも状況が大きく異なることをこどもたちに伝えながら教育を進めています。 災害時の行動は、学校だけでなく家庭での対応も重要です。家庭でどのような人と連絡を取るのか、どのような行動を取るのかをこどもと共有しておくことが、いざという時の力になると考えており、学校としてもその支援をしていきたいと思っています。 近藤座長 こども自身が自分の命を守る力を身につけることに加えて、防災の輪を広げていくためには、家庭や地域、福祉の領域、さらには駅前など人が集中する場所における課題など、リアルな防災の問題をこどもたちに伝えていくことが、真の防災教育につながるのではないかと感じていま

	す。 三戸口構成員 　南区は小中学校における防災授業に取り組んでいただいており、本校でも昨年度に実施していただきました。こどもたちは防災に関する知識を多く持っており、頭の中では理解している様子が見受けられます。しかしながら、それが実際の災害時に行動として移せるかどうかについては、私自身も疑問を感じており、こどもたちも同様に不安を抱いているように思います。学校としても、防災教育の中で、知識を実践的な行動に結びつけるためにはどうすればよいかを模索しており、地域の方々と連携して何か取り組めないかと、ここ２年ほど検討を続けている状況です。 　そのような中で、地域と学校が一体となって行う訓練や活動が実現すれば、こどもたち自身が体験を通じて防災を「自分ごと」として捉えられるようになり、いざという時に活かせる力につながるのではないかと強く感じております。ぜひ、そうした取組について今後も検討を進めていければと思っております。 近藤座長 　現在は中学校の体育館を活用し、要配慮者のための避難スペースを設ける実動訓練が各地で始まっています。車椅子を利用される高齢者の方々を中高生が搬送・引率する取組も行われており、防災と福祉の領域が重なり合ってきている状況です。 　こうした実践的な取組に、ぜひ積極的にチャレンジしていただけると良いのではないかと感じております。それでは、議題２についてはここで区切らせていただきます。 　閉会の前に、議題３として事務局からの案内がありますので、よろしくお願いいたします。 企画総務課長 　ご案内をさせていただきます。 　こどもや若者の皆さんからの意見を伺うための「専門分野別会議」の開催について、進捗状況をご報告いたします。この件は第１回全体会でもご説明させていただきましたが、高校生・大学生等を特別構成員とする会議の開催に向けて、現在調整を進めております。この会議は「未来共創若者部会」として位置づけ、若者の皆様からご意見をいただく場として設ける予定です。 　特別構成員については、南区内の高校・大学等の教育機関に推薦を依頼する形で調整を進めております。加えて、南区在住・在学・在勤の方々を対象に、９月より公募を実施いたします。なお、本件は南区ホームページおよび広報みなみ９月号等を通じて周知し、募集を行う予定です。特別構成員の決定は 10 月頃を予定しており、決定後は特別構成員の皆様と日程を調整のうえ、令和８年１月頃に部会を開催したいと考えております。 近藤座長

	はい、ありがとうございます。本件について、ご質問などはございますか。いよいよ動き出す段階となりましたので、応募が多数になることを期待しております。 宮岡構成員 高校生は４名程度ということでしょうか。 企画総務課長 現時点では高校生を４名程度といった具体的な人数はまだ決定しておりません。募集状況を見ながら調整していく予定です。補足ですが、南区内の学校等から推薦をいただく形と、公募による応募を合わせて、全体で 12 名程度の構成員を想定しております。公募については、広報誌やホームページ等を通じて広く一般に周知し、募集を行う予定です。推薦については、南区内の学校に対して、特別構成員としてふさわしい方の推薦を依頼する形となります。学校から推薦をいただくことで、構成員を選出していく方針です。 近藤座長 公募と推薦の両方で集まった方々は、同様に特別構成員として登録される形になるかと思います。入口としては、本人が自ら手を挙げて応募する場合と、学校が推薦する場合の２つのルートがあるという理解でよろしいかと思います。 それでは、本日の議題はここまでとさせていただきます。 企画総務課 課長補佐 次回の会議は、令和７年 10 月 15 日（水）17 時 30 分からの開催を予定しております。以上をもちまして、「第３期堺市南区政策会議 第２回全体会」を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。 閉会（19 時 02 分）